

氏名	石 瑩
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第231号
学位授与年月日	2020（令和2）年9月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	九鬼周造の哲学における情緒論 —その存在論的分析と形而上的意義について—
論文審査委員	主査 田中久文 （相関文化論専攻 教授） 副査 奥波一秀 （相関文化論専攻 教授） 朴 倍映 （相関文化論専攻 教授） 山田忠彰 （本学 名誉教授） 竹内整一 （東京大学 名誉教授）

## 論文の内容の要旨

### 1. 問題の提起：九鬼哲学における情緒論を全体的に捉える試み

九鬼周造（1888 - 1941）は1909年東京帝国大学文科大学哲学科に入り、哲学の勉強を始め、大学院まで進学した。その後、八年間にわたり（1921 - 1929）、ドイツとフランスに留学した。当時のヨーロッパはまだ第一次世界大戦後の泥沼から復興することができない時期である一方、近代哲学における「人間の生の非合理性」や「人間の实存」に目を向ける新たな思潮がそうした混乱の中から生れたとされている。例えば、ベルクソンの「生の哲学」、フッサールの「現象学」、マックス・シェーラーの倫理学を中心とした「哲学的人間学」、ハイデガーの「解釈学的現象学」などはその時期を代表する新たな思潮である。

九鬼はそうした時代背景の中で、ドイツにおいて新カント学派のリッケルトから、フランスにおいてベルクソン、サルトル、ハイデガーから当時の先端的な哲学を学んだ。特にベルクソンの「新唯心論」・「生の哲学」と、フッサールの「現象学」、ハイデガーの「現象学的存在論」と、マックス・シェーラーの「生の哲学」に深い関心を示している。彼はフランスにおける「実証的精神」に基づいた哲学の特殊部門として生まれた「心理学」と「社会学」にも注目していた。さらに、九鬼はヨーロッパ哲学の解釈学的現象学によって日本文化を分析することに力を注ぎ、ヨーロッパ哲学と総合させながら独自の「偶然性」の哲学を構想した。東西思想を融合する思想家として、当時のヨーロッパの新たな思潮としての実存哲学を日本に輸入し、和辻哲郎とならんで日本における実存主義の第一世代とも評価されている。もとより、実存哲学においては、物事の普遍的で必然的な本質存在に対し、個別的で偶然的な現実存在を優位とみなすため、人間が現実的世界に直面する時に現出する情緒の問題も重要な課題として取り扱われている。それだけではなく、九鬼の研

究は日本文芸などの感性的領域にも及び、文芸哲学者とも言われている。

そうした多様な側面をもつ九鬼の哲学の中で、本論文は特にその情緒論・感情論を中心に考察しようとするものである。

感情に関わる問題は、学問の対象として、古代から東西の思想家によって幅広く検討されてきた。ヨーロッパ哲学では、古代ギリシア哲学におけるプラトンやアリストテレスの「感情を制御しその中庸化を計ることで徳を目指す」倫理的感情論と、ストア派の「感情の根絶を希求し、この方向において徳の成立を考える」感情論から始まり、中世キリスト教哲学におけるトマス・アクィナスの信仰と理性との調和を重視することに基づいた感情論を経由し、近代の人間学におけるヒュームの『人性論』やデカルトの「情念論」、スピノザの『エチカ』、知性に対する感情の重要性を強調するルソーの感情論に至り、さらには現代の現象学・生の哲学におけるキルケゴールやシェーラーの精神科学的傾向の感情論にまで発展してきた。現在では、感情の問題は心理学や脳科学などの新しい方面において研究されるようになってきているが、しかし、哲学の分野において、感情の本質に対する根源的なアプローチはまだ充分ではないと思われる。

また、感情の研究方法については、ヨーロッパ哲学においては感情そのものを「心理学的」に、あるいは「現象学的」に分析する方法が採られたのに対して、日本思想においては「歴史的な感情理論の吟味」を通して、「事象そのものの論理を見いだそう」とする方法が採られてきた。

感情に関わる問題は単なる個人の問題ではなく、個人が属する文化の問題でもある。各文化に現れる感情の様相はそれぞれの文化的特殊性を示している。しかし、感情の本質に関しては、普遍的な様相も存在すると考えられる。

先に述べたように、九鬼周造の情緒論は幅広く東西思想の影響を受けており、その議論は、彼のヨーロッパ哲学史の講義・人間実存論・偶然論・文芸論・日本文化論など多様な分野に散在している。以下、それらを簡単にリストアップしてみたい。

まず、全集第六巻、第七巻『西洋近世哲学史稿』（上・下）においては、ヨーロッパ哲学の歴史が、ルネサンス期の哲学から始まり、その後はカントを境目として、カント以前・カント・カント以後の哲学とに分類されて論じられているが、その中で随所に感情の問題が登場する。それをみると、デカルトやスピノザの人間論から、ドイツの啓蒙哲学におけるまで、さらにカントの美学やシェーリングの神秘主義から、ヘーゲルの精神哲学まで、感情に関する記述はヨーロッパ哲学の歴史の中で一貫してみられる。

全集第八巻『現代フランス哲学講義』においては、十九世紀のフランス哲学における「実証哲学」の特殊学問として確立された心理学における感情論についても詳しく述べられている。

全集第九巻『現代哲学・現代哲学の動向』においては、ヨーロッパの現代哲学が「自然科学的傾向の哲学」と「認識論的傾向の哲学」との二つの時期に分けて述べられているが、特に後者の時期における「精神科学的傾向の哲学」において感情論が重視されている。この「精神科学的傾向の哲学」は、「精神科学的形而上学」と「生の哲学」と「現象学と実存の哲学」との三つの方向に分かれるが、いずれにおいても感情論は重要な位置を占めている。

全集第三巻『人間と実存』という哲学論文集の序文においては、九鬼は実存の問題こそ

最も重要な哲学的課題とした上で、中でも情緒が「自然的人間」の最も重要な問題であるとしている。特に、論文「驚きの情と偶然性」においては、九鬼は偶然的な存在に対する驚きの情を形而上的情緒として検討している。

全集第四巻『文芸論』においては、当時編纂された『新万葉集』に収録されている和歌を手掛かりとして、ヨーロッパ哲学における感情論も参照しながら、四十種類余りの情緒が分析されている。

最後に、全集第一巻の論文「日本的性格」においては、日本文化を「情的文化」として詳しく論じている。そこでは、ヨーロッパ哲学を通して、日本的感情が分析されている。

以上のように、九鬼周造における情緒論は、ヨーロッパ近代哲学における感情論から、フランス哲学における心理学、現代哲学における「精神科学的傾向の哲学」まで、あらゆる哲学の分野にまたがり、さらには日本文化の問題にまで及んでいる。

これらを概観すると、九鬼周造が近代日本における東西思想の邂逅の中で、東西両方の研究方法によって感情を追究した思想家であることが明らかとなる。彼は時代の先端に立って、情緒の本質をヨーロッパ哲学と東アジア思想との両方から、全面的に追究した思想家と言えよう。そうした九鬼の感情論を考察することによって、東西思想を融合させた視点から感情論を全体的に捉え、感情そのものを世界的・歴史的視野から理解し、人間における感情の本質と今の時代における感情の意義を考える一助としたい。

## 2. 今までの先行研究と本研究の位置

今までの九鬼周造に関する研究は、偶然論、時間論、押韻論、日本文化論、文芸論など様々な角度から取り上げられてきた。中国においても、九鬼に関する研究は少ないながらも着実に進展してきた。卞崇道、徐金鳳、徐英瑾、江渝らによって論文や著作が発表されている。卞崇道は「九鬼周造における『偶然』哲学」において、九鬼による解釈学の名著『「いき」の構造』と、九鬼の代表的な哲学的著作である『偶然性の問題』を通して、彼の文化論と偶然論を紹介した。徐金鳳は『九鬼周造における哲学思想の研究—自他関係を手掛かりとして』において、自他関係を中心に、「いき」の美意識と九鬼の偶然論について論じた。徐英瑾は「ウィトゲンシュタインの哲学視野から見る九鬼周造の美学—『いき』論を中心として」において、ウィトゲンシュタインとの比較を通して言語哲学の視点から『「いき」の構造』の特徴を指摘した。江渝は「九鬼周造における『いき』論の哲学構造について」において、九鬼の「いき」論を手掛かりとして、日本文化と西洋文化の融合の方式と、日本文化がどのように独立性を維持するかについて考察した。

日本における九鬼に関する研究は、坂部恵をはじめ、大東俊一、田中久文、藤田正勝、古川雄嗣らによって、偶然論や押韻論から時間論や運命論に至るまで広く行われてきた。しかし、九鬼の情緒論と直接に関わる研究は、田中久文と小浜善信によるものしかない。

田中久文は『九鬼周造—偶然と自然』に収められた論文「『あはれ』の倫理学」において、九鬼の論文「情緒の系図」と「日本的性格」をめぐって、「あはれ」の倫理学という視点から、「情」の自然性と、九鬼情緒論の自他関係の特徴について論じている。田中は「自然」の思想が晩年に重視されるようになったとして、「あはれ」という視点から、論文「情緒の系図」を分析した。そして、「自然」の思想は「いき」の哲学にみられる自他関係の緊張性を克服し、その融和を目指したものであり、そこには倫理性に関する考えを

深める契機があると考えた。小浜善信は『九鬼周造の哲学—漂泊の魂』に収められた論文「神と世界—『驚きの情と偶然性』、『偶然化の論理』」において、まず、論文「情緒の系図」と、フランス留学中に書いた短歌をめぐって、九鬼が情緒をありのままに受け入れようとする心境を論じている。次に、論文「驚きの情と偶然性」をめぐって、驚きの情と偶然性の関係を説明している。いずれにせよ、二人とも情緒論を全体的に論じてはいない。

他には、藤田正勝は『九鬼周造—理知と情熱のはざまに立つ〈ことば〉の哲学』において、九鬼哲学の重要な問題を「いき」論・偶然論・時間論と、文芸論・文化論・自然観・文学などとの二つの部分に分けて、理知的認識と情熱に溢れる感性との二つの視点から論じ、九鬼が「明徹な知性の人」であるとともに「悩み、歎び、燃える『情の人』」でもあったという二面性を持っていることを指摘した。特に、九鬼の中にある「豊かな感性で生き生きとした現実に向かい迫ろうとする」部分と、「厳密な、そして抽象度の高い思弁的な思索に侵る」部分とが同時に存在していることを強調した。

以上のように、九鬼哲学における情緒については、さまざまに論じられてはきたが、その重要性にもかかわらず、その構造と内容はいまだ十分には解明がなされていないと言えよう。

## 論文審査結果の要旨

### I 論文の概要

本論文は、近代日本を代表する哲学者である九鬼周造(1888～1941)の哲学における「情緒」に関する議論を分析し、その意義について考察したものである。九鬼は八年間(1921～1929)にわたりフランス、ドイツに留学したが、当時のヨーロッパは第一次大戦後の混乱の中から、「生の非合理性」や「人間の実存」に目を向ける新たな思潮が生まれてきた時期であった。ベルクソンの「生の哲学」、フッサールの「現象学」、マックス・シェーラーの「哲学的人間学」、ハイデガーの「解釈学的現象学」などである。九鬼はベルクソン、ハイデガーに親しく師事するなど、それらの影響を受けながら、独自の情緒論を構想していった。近年、九鬼の研究は多方面にわたって大きな進展を見せているが、本論文筆者も先行研究を整理する中で指摘しているように、その情緒論については事柄の重要性にもかかわらず、未だまとまった研究が行われていないのが現状である。本研究は、その嚆矢となろうとするものである。

本論文は、序章、本論(第一章～第三章)、結論から構成されている。

第一章「九鬼周造の情緒論の位置づけ」では、九鬼の情緒論が東西両思想からどのような影響を受けて成立したかを分析し、広い視野からその哲学史的な位置づけを明らかにしようとしている。そこでは『西洋近世哲学史稿』『現代フランス哲学講義』など九鬼の哲学史的著作を基に、古代ギリシア哲学におけるプラトンやアリストテレスの「感情を制御しその中庸化を計ることで徳を目指す」倫理的な感情論と、ストア派の「感情の根絶を希求し、この方向において徳の成立を考える」感情論から始まり、中世キリスト教哲学におけるトマス・アクィナスによる信仰と理性との調和に基づいた感情論を経由し、理性による

感情の統御を説くデカルトの「情念論」、さらには現代の現象学・生の哲学における感情論に至るまでの西洋哲学史における感情論の展開が跡づけられ、九鬼がそれらから、どのような影響を受けたかが詳細に分析されている。また、他方で東洋思想との関連、特に老荘思想の「自然」の思想、日本的仏教の「諦め」の思想、本居宣長の「もののあはれ」論などからの影響関係も論じられている。以上の考察によって、近代日本における東西両思想の邂逅の中で、同時代の最先端の方法を駆使しながら情緒の本質を追究した九鬼の姿を浮き彫りにしようとしている。

第二章「九鬼周造の情緒論における哲学的特質」では、九鬼における情緒の定義と分類を、主にデカルトの「情念論」と比較しながら明らかにしている。九鬼は「情緒」という言葉を、デカルトの説く「情念passion」の内でも「知覚perception」や「感覚sentiment」の意味としてではなく、人間の精神を最も根本的に動かす「情動emotion」の意味でとらえようとしているという。その上で九鬼は、情緒を心身合一としての人間が反応する物事の存在様相によって分類している。九鬼によれば、物事の存在様相は「偶然的存在」、「必然的存在」、「可能的存在」の三つに分類できるが、それぞれに応じて「驚きの情」、「快不快の情」、「不安の情」の三つの情緒が生じるとされている。そうした三種類の情緒は、さらに四十種類の諸相に分けられ詳しく考察されている。なかでも「寂しさ」「侘しさ」「甘え」「怨み」「恥」「もののあはれ」等に関する分析は、日本文化論としても興味深いものとされている。その際、情緒を細かく分類する方法としては、デカルトが主として対象の属性が人間の本性に適合するかどうかという観点に拠ったのに対して、九鬼は人間と世界・他者との関係性及び時間性の観点に拠っている。また、ここでは九鬼の情緒論が彼の哲学的人間学と深く関わるものであることも明らかにされている。九鬼は人間というものを「自然的人間」「歴史的人間」「形而上的人間」という三つに分析した上で、情緒の根本は「自然的人間」に根ざしつつも、最終的には全体的「全人」に深く関わるものであるとしている。

第三章「九鬼の情緒論における「諦観」の問題」では、九鬼の情緒論の帰結をなす、形而上的情緒としての「驚き」と「諦め」について考察している。九鬼は「偶然性」の哲学を展開したことで知られているが、その中核をなす「原始偶然」という無限な可能性に満ちた存在に対して人間が抱く情緒が「驚き」であるとされている。それは無限なるものを哲学的に探究する動力となるものでもあるという。また感情に適応する仕方についていえば、デカルトが情念の悪用を理性によって克服する「高邁」の徳をもつことを説いたのに対して、九鬼は東洋思想における「無」の思想に基づく「諦め」という情緒の域に達すべきことを説いた。九鬼によれば、「諦め」とは仏教でいう「不苦不楽受」という中性的な「無記情緒」であるという。そして、九鬼が「諦め」という情緒を重視した背景には、理性と感性との調和を目指した彼の一貫した立場があるとする。そのことを証明すべく、九鬼の様々な文献が再検討されている。九鬼はすでに修士論文「信仰と知識—中世紀に於ける信仰理性問題の歴史的発展—」において、信仰と知識、神学と哲学とが矛盾することなく、相互に自立性を保ちつつも、両者の調和が目指された中世哲学に注目していた。そこで九鬼が志向していたものは、信仰と理性とが分裂し、信仰が精神的意志や感情の問題に分化し、理性が悟性に属する知識に分化する以前の世界であった。また『現代フランス哲学講義』では、哲学と愛とが相互に自立しつつも、最終的には調和するものとする哲

学を九鬼が評価していることが明らかにされている。さらに、講演『現代哲学の動向』では、精神哲学・生の哲学・実存哲学という現代哲学の三つの大きな流れにおいて、共通して感情というものが人間の生全体と深く絡み合ったものと考えられていることが指摘されている。このように九鬼は西洋哲学の隠れた水脈を掘り起こし、自己の「諦め」の哲学がそこに根差すものであることを強調しているとされている。

## II 審査結果報告

九鬼には情緒に関するまとまった論理的著作がほとんど存在しないにもかかわらず、その著作をくまなく渉猟し、そこに精緻な分析を加えながら、彼の情緒論を体系化したことに全員から高い評価が与えられた。その際、これまで余り論じられることのなかった『西洋近世哲学史稿』などの九鬼の哲学史関係の著作に光を当てた点は特に注目された。また、西洋哲学の影響ばかりでなく、東洋哲学からの影響も重視し、「自然」「運命」の思想と情緒との関りを問題にしたことも斬新な観点とされた。

その上で幾つかの問題点も提起された。本論文では「全人」的な調和というものが強調されているが、九鬼の「偶然性」の哲学がそもそも分裂を意味する「二元性」の哲学である点を考慮すれば、議論が半面的になっていないか、また、九鬼の「情緒」論の帰結として「驚き」と「諦め」とが挙げられているが、相反する方向性をもったものとも思われる両者の関係について議論をより深める必要があったのではないか、東洋思想として仏教と老荘思想が主に論じられているが、理性と感情との問題を深めた朱子学などへの言及も欲しかった、母語とする中国語と日本語との微妙な差異に基づく「情緒」論がもう少し展開されてもよかったのではなかったか、等々の指摘がなされた。さらに、今回の論文を踏まえて、次には九鬼哲学との格闘を通して筆者自身の考える「情緒」論を構築して欲しいという希望も出された。

以上のような問題点を残しながらも、本論文は着実な文献の読解と創意に満ちた哲学的思索に基づく意欲作であり、九鬼研究に新生面を開くとともに、著者の研究者としての能力を十分に証明するものであるという点で審査員全員の一致をみた。

以上の審査結果を踏まえて、本委員会は全員一致で、本論文が博士論文としての水準を有するものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものとの結論に達した。

以上